2016／冬

季刊　福井県和紙工業協同組合

和紙だより

■目次

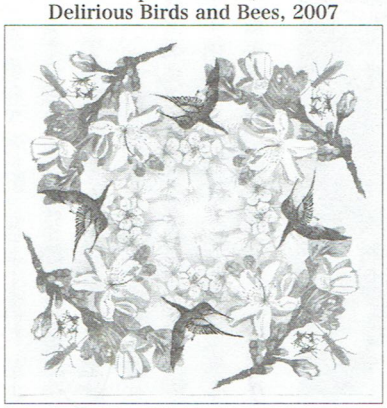
越前和紙への提言　エイプリル・ボルマーさん……1
職人探訪　藤野雲平さん……2
活動紹介　ガンピの増殖法と栽培について……3
和紙ミニコーナー……4
情報欄……4

―越前和紙への提言―

■April Vollmer（エイプリル・ボルマー）
ニューヨーク在住アーティスト。ニューヨーク市立ハンター大学版画コース修士課程修了。その後、ニューヨークや日本で木版画を学ぶ。淡路島での長沢アートパーク・プログラム（2004年）を始め、世界のアート・イン・レジデンス（滞在型制作活動）や国際木版画会議等に多数参加。作品制作の傍ら、その豊富な経験を生かしアメリカ国内の版画工房や大学で水性木版画を指導。昨年、米国ワトソン・ガプティル社から、250ページの木版画の英語解説書「Japanese Woodblock Print Workshop」を出版。

■エイプリル・ボルマーさん（木版画アーティスト・指導者）「木版画技法を世界に広める」

April Vollmer,
Delirious Birds and Bees, 2007



●木版画こと始め

大学では主に西洋版画の伝統的な技法である油性版画やエッチングの作品を制作していました。その後、一九六〇年代当時京都在住の著名な木版画家クリフトン・カーフに学んだビル・ペイドンというアーティストの元で木版画をニューヨークで勉強しました。一九九五～一九九九年には、コロンビア大学の木版画教室で版画家野田哲也さんと出会い、交流も始まりました。

学ぶにつれて、木版画が予想以上に自分の作品の幅を広げてくれる事に気づきました。西洋版画のように大きく重いプレス機も必要ないので小さなアトリエでも制作できます。有害な溶剤を使わず、色も綺麗にコントロールできます。使用する水彩絵具や顔料による色の透明度や重色の美しさ、和紙の質と作品の関係など理解が深まりました。濡れても正確に「見当」を付ける事のできる寸法の安定性に優れた和紙は、「浮世絵」の技法においても需要な役割を果たし、バレンで強く擦っても破れませんので、同じ版を複数のレイヤーで摺る事ができます。

一九九八年から、マンハッタンの版画工房を皮切りに大学、美術館、工房などで木版を教えていますが、生徒達は今まで出会った事のない技法に魅了され、いつも質問攻めです。主にプレス機が不要で、無毒であるという技法に興味があり、環境意識の高い美術大学では、工房をできるだけ無害にしたいという動きもあるからです。

●アメリカの木版画事情と本の出版

和紙も道具も見たことのない人達に木版画を教えるのはとても難しく、根気がいります。私は自分の授業ノートを元に、英語圏の人たち向けに教材として使える本を作ろうと決心し、三年かけてこのほど出版にこぎつけました。アメリカの美術大学では木版画は他の手法と組み合わせて使う技法の一つとして学ぶ場合が多いのですが、私はむしろ伝統的な日本の技法をきっちりと紹介したいと考えました。

Japanese Woodblock
Print Workshop 表紙
ISBN: 978-0-77043-481-6

◀バレンの作り方（上）や刷毛（下）も解説

本の中では、特に和紙に一章を割き、歴史、彫刻刀の砥ぎ方や持ち方、版木の彫り方、摺り方、見当の付け方、バレンの皮の交換方法、など写真付きで丁寧に解説しています。

近年各国でアート・イン・レジデンス（AIR）が盛んですが、出版社との契約後、記事作りには門田けい子さんの運営するAIR「国際木版画ラボMI-LAB」のリサーチプログラム（文化庁支援）や、道具や作業の写真撮影にはメイン州立大学の写真のAIRを利用させていただきました。和紙についての原稿は日本でなくてはできないので、小川和紙などを訪れて詳しく勉強することができました。

木版画会議も重要な情報源ですが、会場で展示販売するトレードフェアは、アーティストが情報を得、直接材料も購入することができるいい機会です。レジデンシーやオンライン会議での交流も盛んになってきました。木版画の未来はこのような木版画に関心のあるアーティストのネットワークにかかっていますので、本にはバレンフォーラム、雑誌、木版画教室、レジデンシー、版画会議などの情報をリストアップし、付録に収録しました。米国人は何事もインターネットでまず調べます。和紙情報などもせめてタイトルだけでも英語にして下さると、私達はとても助かります。

河口湖畔の
国際木版画ラボ（MI-LAB）の様子

●和紙の供給について

十年くらい前まではアメリカ人は和紙のことを「ライスペーパー」と言っていたものです。さ

すがに現在は、殆どのアーティストは和紙と洋紙の違いを認識し、和紙がある特異なタイプのハンドメイドの紙だということは知っています。しかし、その繊維が何で、どういう風にして取り出され、どのように処理され、高いけれども漂白されていない手漉き和紙が、何故木版画に良いのかを理解している人は少ない。いい紙を見分けるのには、実際に触ってみたり、濡らしたり、摺って使ってみる体験が必要で多くの時間がかかります。サンタモニカのHiromi Paper Internationalやトロントの Japanese Paper Placeの二拠点は、和紙をよく知り、いい情報を持っていて、和紙を熱心に教えるお店です。紙の名前は、産地、用途、材料、時代などに因んだ様々な名称で呼ばれるので、外国人にはチンプンカンプンです。供給店によって、独自の名前を付けられることもあるので余計混乱します。

現在私は日本の漂白していない百%楮の薄漉きの耳付き紙などが気に入っています。作品のテーマが植物や自然のものが多いので、摺った後も紙のテクスチャーと一体となる自然な感じを表現したいからです。日本では木版画はあまり人気がないと聞きます。小学校で年賀状を作るくらいしか学習しないようですが、大げさな機材も必要なく、版の使い方など新しい手法を研究すれば、可能性の高い技法です。何より豊富な和紙と文化の歴史があるのです。もっと見直して楽しんでいただきたいですね。

April Vollmer,
Migrating Gyre #6, 2008

■筆の源流、四百年続く紙巻筆「雲平筆」

「攀桂堂」(はんけいどう)
十五世 藤野雲平さん

和紙が書写に用いられた歴史は長く、明治期に鉛筆やペンが入ってくるつい最近まで私達日本人は、和紙に筆で墨をつけ、万事物事を書き記してきた。今日ではボールペンなど様々な筆記具があり、筆は祝儀袋や芳名帳・年賀状などで使うか、書家や日本画家などが作品制作に使うプロ用の道具となり、日常的には余り使われなくなったが、ここに四百年続く日本の筆の原点とも言える「紙巻筆」というものがある。材料の一部に和紙を用いるので、直接的にも間接的にも和紙と関わりの深い筆である。

「攀桂堂」は、奈良時代〜江戸時代末期、日本の筆の主流と考えられてきた紙巻筆を製造する日本唯一の筆屋さんである。創業は、近江の肥田城主重臣の次男久木又六が、藤野姓を名乗り天文年間に京都に出て、その三代目が元和年間(一六一五年〜)に名を雲平と改め、筆工を営んだことに始まる。正徳年間、五世雲平の時、近衛予楽院家熙(いえひろ)公より「攀桂堂(はんけいどう)」の屋号を賜る。明治の末に東京で店を構えるが、関東大震災で罹災し、安曇川町上小川に移住、現在に至る。現当主、十五世藤野雲平さんにお話を伺う。

●紙巻筆「雲平筆」とは?

現在私達が使う筆のほとんどは江戸時代末期より明治時代にかけて、製法が伝わった紙巻をしていない「水筆」(すいひつ)で、広島県熊野町などが産地として名高い。紙巻筆は、この水筆に比べ格段に手間がかかるので、明治以降、次第に作られなくなっていったという。

一般的な筆も紙巻筆も、まず毛の表面の油分を抜くため、もみ殻の灰をまぶし、熱した後、鹿革に包んで揉み(脂抜き)、芯にする何種かの毛を組み(毛組み)、中心に硬い毛、その上に柔らかい毛を重ね、練りまぜ芯を作る(芯立て)。その後、紙巻筆は、数カ所を麻糸で仮締めし、それを根元より毛先の途中まで和紙で巻き締める(紙巻き)という工程が入る。最後に一番上に化粧毛を付け筆管に納める。毛は、兎、鼬、山羊、狸、馬の毛など様々なものを用いる。紙は帯状に和紙を切り、最後の部分を少し湿らせ、段差が出ないように斜めにきつく巻いていく。独特の形をした「雀頭筆」や大字用「籐巻筆」はこの紙巻きを何回も繰り返す。そのためしなやかで薄めの強い手漉き楮紙が最適とされる。紙を巻くことで、筆の穂の上部はおりない(毛がさばけない)構造のため、毛先がバラバラにならずまとまりやすく、弾力性に富む腰の強い筆となる。

●書の歴史とともに伝わる様々な筆

藤野家に伝わる紙巻筆は、大きく四種類。

一、「雀頭型」は正倉院に伝わる日本で最も古い筆と同じ構造と形状を持つ。主に写経に用いられた筆で、きっちりした楷書を書くのに適する。先代の十四世雲平氏は、宮内庁より正倉院宝物の「大仏開眼供養筆」の復元を依頼され、鹿の夏毛を集めるのに六年かかったというが、一九七九年に完成させた。

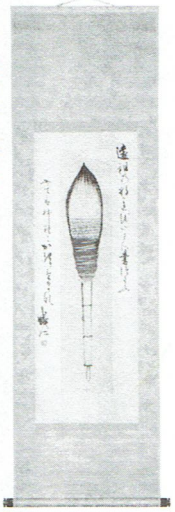
二、「名家書流」は、平安時代以降、和様書の確立とともに花開いた歴史上の名筆、三筆(空海、嵯峨天皇、橘逸勢)、三蹟(小野道風、藤原行成、藤原佐理)の他、江戸時代の寛永の三筆の一人である本阿弥光悦に因んだ名が付けられている。雲平筆が仮名書の歴史と共に歩んできた様を忍ばせる。やや大きめで、命毛と呼ばれる毛先が長く、スマートな形をしている。

三、「上代様」「消息筆」など、短冊、懐紙、消息など用途を意識した、やや小ぶりな仮名書用筆。

四、「籐巻き型」は、籐と金網を使って作られる漢字大字用。このタイプの筆を製造しているのもここだけだ。紙は金網部分まで巻いてあるので、その先は全部下ろすことができる。書学院長、比田井和子氏は「太細や強弱、潤渇を書き分けることができ、スピード感やリスム、豪放や優しさを表現できる現代書を拓いた筆」と絶賛し、書家にもこの筆の熱烈なファンは多い。その他にも、昭和・平成期に書道家、書道指導者の協力の元に開発された「平安かな書法」「源氏」などがある。

●四百年という節目に本を出版

江戸から「有栖川流」に愛されてきた雲平筆は、明治時代十二世の時、有栖川熾仁親王から依頼された多くの筆が現在も残っている。優美で特徴的な書風の有栖川流書道は天皇や皇族、一部の公家達に継承されている書の流派で、明治の「五箇条の御誓文」の正本も有栖川流で記されている。工房の床の間には、熾仁（たるひと）親王の、雲平筆を讃える歌を添えた筆画が飾られている。



有栖川熾仁書　筆画
「遠祖のながれをいまに　書きつたふ
ふではふじ野にかぎりけるかな」

昨年は創業四百年を迎えるにあたり、雲平筆の歴史や技、藤野家に伝わる書、書簡類、寄稿文などを収録した本を出版した。

雲平さんは「今は便りもメールですが、書くことの楽しさをも一度見直して、味合う『生活の中の書』などにも、筆を使っていただくと嬉しい」と語った。

四百年記念出版物　頒価：2,500円
お問合せ：（有）東京文物
E-mail：bunbutsu@opal.dti.ne.jp

活動紹介

■特別講演会「ガンピの増殖法と栽培について」

今井三千穂氏（樹木医・元福井県総合グリーンセンター林業試験部長）

国内における和紙の主原料（雁皮・楮・三椏）は、生産者の減少・高齢化などで近年生産量が激減しており、原料の栽培・収穫は和紙生産者自らが行わなければならない事態も予想されている。ユネスコ無形文化遺産登録を目指す「越前生漉き鳥の子紙保存会」は、去る九月十八日、樹木医の今井氏を招き講演会を開催。氏は長年にわたり和紙原料の栽培法を研究し、栽培実証も行ってきた。今回は栽培が難しく山野に自生しているものを採取する以外ないとされてきた、鳥の子紙の原料、ガンピの栽培知識とポイントについてお話いただいた。

今井三千穂氏

●発芽を促進する「温湯浸漬処理」増殖法

日本列島には十種類の雁皮があり、東海以西・四国・九州に分布するいわゆる本ガンピが鳥の子紙でよく使われる種類である。他にも宮崎県のシマサクラガンピ、関西以西のキガンピ、伊豆地方のサクラガンピなども昔から紙にされてきた。フィリピンでは「サラゴ」という常緑性のガンピが五種類くらいあり、輸入材料としても使用される。

ガンピの栽培が難しいとされる主原因は種子の発芽率の歩留まりの悪さにあり、通常採取した種を播いても一年目ではわずか八％しか発芽しない。そこで氏は「温湯浸漬効果」を利用した発芽促進法を開発。

春先枝の先に花が咲き、自家受粉することによって形成される種を十月中旬～十一月初旬頃に採取する。その種を水切りネットなどに入れ、土の中へ埋めておく。埋めておいた種を三月頃取り出し、少しほぐした後、水を入れたバケツにあける。下に沈殿したい種だけをただちにガーゼに包み、静かな所で五十五度のぬるま湯に一分間浸す。するとピシッ、パチッと音がし、その音は十二、三秒間続く。その後冷水に浸し、冷蔵庫の野菜室などに保管し、四月中旬頃、畑に播く。

●ガンピ

●キガンピ

種から鉢植えで苗木を育て、栽培地に移植する方法も活着が良い。温湯処理した種をジフィーポット（植物の移植・育苗に用いるそのまま植えられる鉢）の中に六㎜くらいの深さで一粒を埋める。ポット苗木の培養土は容積比で、粘土質の少ない未熟土：三、キノックスなどのバーク堆肥：一を混合する。ポットは遮光率五十％くらいの光環境下に並べ、発芽後、葉が三～四枚になったら、IB化成（大粒）肥料を三粒施す。ポット苗木はそのまま土中に植えられるので、周年移植が可能である。

ガンピは、このような種子による「実生繁殖」の他、挿木・取木・接木・組織培養による「無性繁殖」でも増殖することができる。

●ジフィーポットで育てた苗木は活着がよい

●ガンピの温湯浸漬効果
-左が55℃の湯に浸け、発芽が促進されたもの

●山や畑に植える

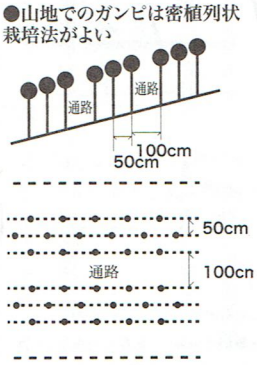
通常ガンピは流紋岩・花崗岩・安山岩凝灰岩地帯に分布し、pHは四～六でよく育つ。腐植層のある水はけのよい土壌に植えるのがよいが、過去に畑地であった所は病気が出やすいので注意を要する。

山ではコナラ・ソヨゴ・ミツバツツジの木やシシガシラ・ウラジロなどが成立している所がよい。

山の傾斜地に、横に移動できる一ｍくらいの通路を作っておくと管理しやすい。ガンピは陽樹であるが、外の明るさを百とした時、四十～五十くらいに保つのが良い。十ｍ四方に四〇〇本が目安。永平寺近くの山の栽培実験では四年で収穫できた。

畑地に植える場合には、密植によって相互庇蔭を与えると良い。株間＝五十㎝、列間＝五十㎝で、千鳥植えにした武生の試験地では、雑草の生育も抑えられ、二・五ｍくらい伸び、こちらも四年目で収穫できた。

●山地でのガンピは密植列状栽培法がよい



植栽後の管理は、一平方メートルあたり五十ムグのIB化成肥料を追肥し、山では年二回程度の下草刈りとツル切り。動物の食害がある時はネットを張る。

●栽培したガンピの品質

試験栽培したガンピは、県工業技術センターで物性評価を調査した他、実際に職人にも紙漉きを依頼した。

紙質は、四年栽培すれば十年ものや、十五年ものの自生ガンピの化学組成、強度、光沢ともに何ら差異はなく、いい皮が収穫できることがわかった。山での収量は、黒皮で二五五Kg、白皮で一三二Kg、歩留まり五一・三%。畑地では十アールあたり、黒皮で五五七Kg、白皮で二八八Kg、歩留まり五一・七%で、双方とも歩留まりは概ね五十%程度。

職人の評価では、成紙歩留まりが天然ものより著しく高く、チリが少ない、白皮の煮くずれがなく仕上がりが良好との評価を得る。仕上がった紙は粘りがあり、緻密で、ツヤがあり、ガンピ特有の光沢のあるいい紙に仕上がった。

今井氏は、以前、紙産地で原料も栽培するように働きかけたこともあったが、その折は産地も余裕がなく、あまり本気に取り組むところがなかったという。しかし最近は栽培法を教えて欲しいと各地から招かれる。「ユネスコ登録にもなる和紙が、地産地消でものづくりをすれば説得性のあるいい観光資源にもなります。種子を持続的に採るために、産地の方は自分の家でも庭木にして植えるといいですよ」と語った。

和紙ミニコーナー

■明らかになってきた「古文書・古典籍の料紙」開催

去る十一月七日、毎年恒例の和紙文化研究会主催、第二三回和紙文化講演会が、東京芸術大学で開催された。今回のテーマは、古文書・古典籍の内容だけでなく、それが書かれた紙に対する研究も進んできたことから、和紙の種類や料紙の用途との関係を探る研究会となった。

まず、富田正弘氏(富山大学名誉教授)は、謎の多い「杉原紙」について仔細に考察。南北朝期の杉原紙から大きく厚く簾目が太く目立つ強杉原、室町後期に品質の良い御教書(みきょうし)杉原・奉書杉原、江戸期に至って御教書杉原を大型化・良質化したものが、高貴の人達の公文書として使用された奉書紙であろうと流れを検証した。

その後、「料紙を形成する繊維について」(原啓志氏)、「和紙の表面観察による繊維調査法」(宍倉佐敏氏)、「料紙繊維の非破壊調査について」(高橋祐次氏)、「古文書・古典籍の料紙素材の近年の調査報告」(増田勝彦氏)の各氏が発表。和紙の表面観察では、コンピュータとマイクロスコープをつなげ、画像を見ながら、参加者に繊維の見分け方を伝授する試みも行われた。

会場には、昨年逝去された「和紙文化研究会」名誉会長、久米康夫氏のコーナーも。

情報欄

●イベント情報

■平成28年　越前和紙祈願祭・漉き初め式

時:平成28年1月5日(火)9:30〜

場所:卯立の工芸館(越前市新在家町)

■新年賀詞交歓会

時:平成28年1月5日(火)11:00〜13:00

場所:生涯学習センター今立分館

■生誕百年記念「職人文人　柳瀬良三」

一人の人間としての職人の素顔を捉えた展示会です。

時:平成28年1月6日(水)〜2月29日(月)

場所:卯立の工芸館

※紙の文化博物館はリニューアル休館中です。

(平成29年春オープン予定)

■越前和紙展〜版画の紙を極める

-越前和紙が創り出す木版画とレンブラントの世界-

時:平成28年1月19日(火)〜29日(金)

場所:東京日本橋　小津ギャラリー

■東京インターナショナル・ギフト・ショー春2016

時:平成28年2月3日(水)〜5日(金)

場所:東京ビックサイト東館　展示

■越前の紙職人が主人公、映画「つむぐもの」が2016年春公開

頑固な越前和紙職人と韓国から来た勝気な若い娘が、介護や伝統工芸を通じて心を通わせていく人間ドラマが近日公開になります。日韓国交正常化50年を迎えた今年それぞれの地で撮影を敢行。国際交流、伝統文化の継承というテーマを織り交ぜながら「介護」に新たな光を当て、人と人のつながりを描いた作品です。

編集後記

巻頭インタビューしたAprilさんからサジェスチョンされましたように、今号からタイトルだけでも英語にしてウェブサイトに掲載しましょう。(よ)

季刊・和紙だより 第49号(2016年冬号)　発行日:2016年1月7日　和紙だよりURL→http://washidayori.jimdo.com/
発行人:福井県和紙工業協同組合　石川浩　〒915-0234　福井県越前市大滝町11-11　TEL: 0778-43-0875　FAX: 0778-43-1142
編集所:Office YOMOSA　〒606-8172　京都市左京区一乗寺河原田町37-1 #506　Tel/Fax: 075-702-6466　E-mail: myomosa@zeus.eonet.ne.jp
編集人:右衛門佐美佐子・田中裕子　印刷所:有限会社マスヤ印刷(福井県越前市)　用紙:機械漉き大礼紙(石川製紙株式会社製)
※無断での転写・転載はお断りします。